

沖縄協会だより

2023.3

No.27



高藤義雄 作

燦一沖繩 号数：F100

高藤義雄 大正9年 京都府生

画歴

美術文化展プールヴー賞、金山賞候補美術展出品、フランス美術賞展入選、第7回現代洋画精鋭選抜展金賞、同展第10回記念大展大賞。日本美術家連盟会員。

制作意図

昭和54年三回に亘り沖縄を訪れまさに「太陽の国」という強い印象を受けた。明るく豊かな太陽に恵まれた沖縄の風土に根ざした文化とそこに生きる人びとの生活に大変魅力を感じた。さんさんと照りつける太陽には厳しさもあるが、太陽を愛する人びとの生活の中に「水浴する太陽」ということばがあると聞き深く感動した。この姿こそ平和そのものであり、この感じを明るい太陽のもとで生活を営む住民の姿を琉装の婦人と七色に輝く海に浮かぶサバニで表現した。(昭和55年2月15日寄贈)

額サイズ

縦×横×厚【143×182×9cm】



沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

第44回 沖縄研究奨励賞・受賞者記念講演

沖縄協会は、令和5年1月25日「第44回沖縄研究奨励賞贈呈式」を開催した。今回受賞した自然科学部門の玉城磨沖縄県農業研究センター・上席主任研究員、井口亮産業技術総合研究所・主任研究員、人文科学部門の照屋理名桜大学国際学群・上級准教授に、清水治会長代理の上原良幸副会長から本賞（賞状盾）と副賞が贈呈された。受賞者3名による受賞記念講演の内容を紹介する。

第44回（令和4年度）沖縄研究奨励賞贈呈式



第44回沖縄研究奨励賞
受賞者（右から）照屋理氏
井口亮氏、玉城磨氏

沖縄農業の未来を拓く ―台風対策技術と施設 園芸の展望―

玉城 磨

この度は、沖縄研究奨励賞という名誉ある賞をいただき、大変光栄に存じます。推薦頂いた農業施設学会長と理事会、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。また、私が研究者としての基礎と、思考の土台となる知恵を与えてくださった故岩田進午先生、中石克也茨城大学特任教授に感謝申し上げます。また、台風対策の研究を進めるにあたり、ご協力を賜りました京都大学防災研究所教授の丸山敬先生、元日本建築総合試験所の西村宏昭博士に心から御礼申し上げます。最後に、今回の受賞に関し、選考頂いた皆様、そして、現在も園芸施設内環境制御に関する研究において、丁寧にご指導下さる東京大学・長崎大学名誉教授高倉直先生、日本大学教授佐瀬勲紀先生に深く感謝申し上げます。

『研究の背景』

園芸施設の利用目的は、作物生産のための好適環境を生み出し、作物の高品質化、多収量、安定生産を図ることである。作物生産に最も重要な要素は日射であり、例えばトマトの年間平均収量が60 kg/m²（沖縄の平均収量の約10倍）に達するオランダやアリゾナでは、作物生産における1%の光量減少は1%の収量低下につながると考えら

れている（写真1）。作物生産に必要な日射を園芸施設内に最大限に取り込むためには、園芸施設の構造は骨組構造となる。沖縄の園芸施設は骨組構造という条件下で耐風性を確保しなければならぬことから、一般建築物とは異なる視点での設計および研究開発が必要となる。



写真1 採光を重視したアリゾナの園芸施設
（2018.2.21撮影）

『研究成果』

当方の研究開発では、台風被害例の調査と分析を通じ、耐風性と低コスト化の両立を可能とする園芸施設や台風対策技術の開発に取り組んできた（写真2、写真3）。近年の研究開発では、低コストで施工でき、かつ高い耐風性能が経験的に認知されているものの、強度が定量できないために、改良が困難であったネット（網）を被覆した園芸施設の設計手法の確立に努め、実用化の目処も立っている。

『研究の将来』

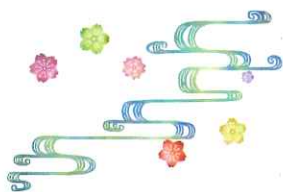
近年の物価高騰等の諸問題を鑑みると、沖縄農業においても農家収入の向上に貢献する技術開発が喫緊の課題となっており、新たな沖縄型施設開発だけでなく、既存の園芸施設においても作物の増収に寄与する技術が求められている。中でも、増収に必要な環境制御技術と減収要因である作物ストレスの緩和技術は重要な研究テーマであると捉え、前者に



写真3 沖縄県内の企業と共に開発した低コスト耐候性ハウス「AET」



写真2 2003年台風14号来襲による園芸施設の被災状況



受賞記念講演の様子

についてはすでに暑熱対策技術開発に着手しており、光散乱フィルムのような新フィルムの特性評価に取り組んでいる。一方、沖縄の強い日差しの下では、作物も強光ストレスを受けることが分っており、現在、その評価技術開発に企業や大学と共に取り組んでいる。今後は、ロボット技術や情報通信技術（ICT）を活用したスマート農業の活用も視野に入れながら、耐風性、環境制御、作物ストレスをキーワードとして研究の場を広げ、沖縄農業の発展に貢献することを目標とする。

造礁サンゴ類の環境応答に関する総合的研究 —これまでの研究と今後の展望に向けて—

井口 亮

沖縄周辺に見られるサンゴ礁生態系は、豊かな生物多様性とその美しい景観で知られており、水産資源や観光資源などの生態系サービスを提供しているため、人間活動と密接な関係にあります。そのサンゴ礁生態系を支えているのが造礁サンゴ類ですが、環境変化に鋭敏なため、地球温暖化や海洋酸性化、陸域からの栄養塩負荷などによって世界的にも減少が危惧されています。こうした背景を踏まえて、講演者らは、野外調査や飼育実験、遺伝子解析による多角的アプローチを通じて、サンゴの環境応答機構の解明を目指した研究を進めてきました。

主要な研究成果として、産業革命が始まる前の海水環境では、サンゴの成長は現在の海水環境で育てた条件よりも明らかに成長が良く、海洋酸性化による悪影響は、既に進行中であることが分かりました。海洋酸性化は、サンゴの石灰化を低下させる一方で、同じ種内ではより多くの群体を調べると、中には海洋酸性化に耐性を示すような群体も見られました。また、白化を引き起こす高水温ストレスに対しても耐性を持つ群体も観察

されました。こうした種内に見られる多様性は、今後の環境変化に対してサンゴが生き延びる可能性につながる「希望」でもあり、最新の遺伝子解析技術を用いてその要因解明を現在進めております。

最後に、講演者が所属している産業技術総合研究所において、産業に伴う開発利用と環境保全を調和可能にし、社会の「備え」に貢献することを目指した環境調和型産業技術研究ラボ（Phono）が2020年に設立されました。その中で、講演者らは、沖縄本島全域を対象とした環境DNA調査を開始し、サンゴ礁だけでなく、マングローブ干潟や海草藻場などの沿岸生態系、そして陸域生態系も含めて、微生物から大型生物まで網羅的に把握することを目指しています。最新の技術を用いて、美ら島・美ら海の自然全体を俯瞰した先に何が見えるのか、そして沖縄の地域振興への貢献に向けて、得られた成果がどのように活用されるのかについても語りたいと思います。

口承と筆録文芸のはざま

照屋 理

奄美諸島から八重山諸島まで広がる琉球文化圏には、神歌や琉歌、説話、ことわざ、慣用表現等といった口頭で伝承されてきた口承文芸が数多く残り、現代においても息づいている。中には、首里王府によ

って記録され、筆録の作品として数えられる『おもろさうし』や、近代に入って研究者により記録された神歌群もあるが、これらも本来は口承文芸としてあつたものである。

以上のように琉球文化圏の文芸作品は多岐にわたるが、それらを生み出し、育み、伝承してきたのは基本的に琉球文化圏の人々である。そしてそれらの人々には共通する概念や、文化的パラダイムの共有等がなされていたであろう。そのようなパラダイムを探し出し、神歌や説話、慣用表現等といったジャンルの異なる口承文芸作品同士、あるいは口承文芸と筆録文芸のはざまを埋める可能性を探ってみたいというのが私の抱負である。

今回評価していただいた論考の一つとして『おもろさうし』の他界観と寄り物伝承—名護におけるイル力に関する伝承を中心に—があるが、これは首里王府によって筆録・編纂された『おもろさうし』と、名護市に伝わる世間話とも呼ばれるような微細な口承文芸（説話）とののはざまを埋めるべく論じたものである。

現沖縄県名護湾一帯は、1980年代までいわゆるホエールストランディングの見られる海岸で、地域の人々にとってイル力や小型のクジラは貴重なタンパク源であった。そんな名護地域には「名護の首長の人徳が高い」とイル力は寄ってくる。そしてイル力は稲の豊作をもたらす。しかし、首長に人徳がないとイル力は

寄つてこない」という伝承が現代まで残っている。

これは単なるゲン担ぎではなく、「J・フレイザーの『金枝篇』にある『殺され王』の概念の存在を示唆する内容である。同様の説話や伝承は琉球文化圏には複数みられるが、日本本土には管見の限り見当たらない。ところが中国や東南アジアの一部地域には類話が存在している。中世琉球期につながる名残として、また、オモロに底流する世界観などを論じる上で、環太平洋地域を包括した目配りが求められることを教示する、非常に貴重な伝承資料ということになる。



贈呈式の様子

協会関係事業他

募集案内など

★沖縄協会理事会・評議員会

2月28日、本会は、2022年度第2回理事会・評議員会を那覇市内のパンフィックホテル沖縄で開催した。主な議案は2023年度事業計画及び収支予算等で、清水会長他理事・評議員によって慎重に審議され、承認を得た。

★重田辰弥評議員から10万円の 寄附金

2月28日、重田辰弥評議員(写真右)から寄附金10万が寄せられた。理事会会場にて、清水会長(写真左)に目録が手渡された。



★岩手県立不来方高等学校 音楽部沖縄公演

「平和を祈るコンサート」

3月26日、岩手県立不来方高等学校音楽部沖縄公演「平和を祈るコンサート」が

沖縄平和祈念堂で開催された。出演者は在校生・卒業生をあわせて約80名。2003年に予定していた同校のイタリア公演が直前にイラク戦争勃発のため中止を余儀なくされ、その時に日本で平和を祈って歌った曲「さとうきび畑」にめぐり逢い、以来、20年にわたって歌い継いだこの曲を本土返還50年目となる沖縄で歌いたいという強い願いから今回の公演が実現した。前日の25日には沖縄市民会館で、沖縄県立那覇国際高等学校・小禄高等学校の合唱部、コザ高等学校吹奏楽部、沖縄県立芸術大学音楽学部琉球芸能専攻の皆さんと共演でコンサートが開催され、26日は平和祈念堂でのコンサートの他ひめゆりの塔、平和の礎で献唱を行った。演目は、さとうきび畑をはじめ沖縄や岩手にちなんだ曲などで、美しく織りなす合唱の調べは訪れた約90人の聴衆を魅了した。



★2023年度沖縄青少年勉学 支援生募集

2023年度の沖縄青少年勉学支援生の応募は、4月1日から6月30日まで。当日消印有効。勉学支援を希望される方は、本会ホームページで申請書をダウンロードし、必要事項を記入のうえ必要書類(在職証明書・在学証明書)を添付して郵送して下さい。7月に行われる審査委員会において、当該年度の勉学支援生を決定します。

【申請書の送付先】 〒103-0001

東京都中央区日本橋小伝馬町17-6

シエスタ日本橋 201

(公財) 沖縄協会沖縄青少年勉学支援担当宛

★沖縄平和祈念堂改修工事に伴う ご寄付のお願い

開堂から45年を迎えた沖縄平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻繁に実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様に諸経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。ご連絡いただきましたら、ゆうちよ銀行専用振込票を送付させていただきます。

公益財団法人 沖縄協会

【電話番号: 03-6231-1433】

【FAX: 03-6231-1436】

※詳細は、公益財団法人沖縄協会のホームページより



沖縄平和祈念堂美術館

沖縄を描く：沖縄をモチーフにした作品 2

守禮之門と鳩 角浩 作

角浩 明治42年 広島県生

画歴

東京美術学校卒、藤島武二・岡田三郎助に師事。チューレリー無鑑査文展入選、サロン・ドートンヌ展出品。新制作会員。平成6年没。

号数 F8

額サイズ 縦×横×厚【57×64×5 cm】

